
正道の系譜

ぎやぎやす子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正道の系譜

【Nコード】

N2369BA

【作者名】

ぎゃぎゃす子

【あらすじ】

秋月直樹を主人公とした、とても長い話になります。

裏世界やちょこつと恋愛、普通の友情等いろいろ…。

後々残酷な描写も入るかと思います。お気を付け下さい。

某所で連載していたものを加筆・修正したものです。

フィクションでもノンフィクションでも、お好みでどうぞ。

気の長い方、お暇な方、どうぞお付き合い下さい。

正道の系譜（前書き）

少し残酷な描写が入りますので、お気を付け下さい。

フィクションでもノンフィクションでも、お好みで読んでいただければと思います。

長い話ですので、気の長い方やお暇な方、どうぞお付き合い下さい。

正道の系譜

この少年は、この地に引越してきて今日で5日目。

5日前までは東京で暮らしていたが、両親の仕事の都合でこの関西に移り住むことになった。

14歳のこの少年は、身長がすでに180センチほどある。

ちんちくりんの詰襟の学生服を一番上まで留めて、眼鏡を掛け、ぴつちり横分けのヘアスタイル。

彼の名前は、秋月直樹。

直樹は東京在住の頃、とても偏差値の高い中学に通っていた。

関西に移り住むことになり、学校のランクが落ちたような気がしていたが、彼にはさほど問題はない。

強いて言うならば、この賑やかな街が肌に合わないかもしれない。

5日目でそれくらいの判断をする程度。

要するに、完璧なほどにスクエアなステップを踏みしめる直樹には、それほど問題ではないということだ。

その日家に帰ると、珍しく父親がいた。

「ただいま帰りました。お父さん」

「…うむ」

直樹は幼い頃からこの父が「ああ「うむ」、経営論、教育論以外を口に出しているところを見たことがない。

この家での直樹の立場。

「お父さん」と呼んだこの父は、実の父親ではない。母も。

直樹は3歳の頃、この家に貰われてきた。

父親が経営する不動産・建築関係の会社、これを継ぐべくこの家にやってきたのだ。

義理の父、義理の母というものが本来、養子に対してどのような教育をするのか直樹は知らない。

しかし彼らを『本当の父と母』、そのように思い、この会社を継ぐべく、両親の財力をフルに活用した教育方針・教育理念を一手に引き受け、この家で過ごしている。

この日は珍しく、父も一緒に夕食の席に着いた。

「直樹、今度の学校はどうだ」

そう問う父に対し、

「何の問題もありません」

そう答える直樹。

父の事情は分かっている。

父の会社は今回、この関西に足場を固めるべく進出した。

部下に任せるのではなく、自らがこの進出に関わるということがどれだけ社運を賭けてのものなのか。

それを考えれば、賑やかさが合わない、言葉が合わない、学校のランクが少し落ちた、などということは直樹にとっては本当に、何の問題もないことなのだ。

母も直樹に言う。

「何か不満があるなら、前の学校に戻ってもいいのよ」

「いえ、大丈夫です。お母さん」

母とする会話はいつもこのようなもので、後付けされるようなものばかり。

それも直樹にとっては、何の問題もない。

お手伝いさんが食事の用意を済ませ、3人で食事をしていると玄関からバタバタと音がした。

「バタンツ！」と勢いよくドアを開けて入ってきたのは、ドロだらけの弟の慶也。

直樹の3つ年下の弟だ。

慶也は、直樹がこの家に来た翌年に生まれた、両親にとっては本当の息子。

彼は関西に来てすぐにリトルリーグに入り、毎日毎日野球の練習に明け暮れている。

勉強の方かというとそれほど悪くはないのだが、父の設けている高さには到底追いつけない位置にいた。

食堂に入ってきた慶也は父を見て、ハツとして俯いた。

「今日も父はいないものと思いついていたのだろう。」

「慶也！お前はいつまでそんな下らんことをやっとするんだ！？そんな時間があるなら、塾にでも行きなさい。」

「野球みたいなものが、将来身を結ぶと思っているのか？」

「私の息子がクズでは面目が立たんだぞ！？」

「こついつた言葉も、直樹は聞き慣れている。」

「しょんぼりとした慶也に母が駆け寄り、」

「さ、ごはんがあるから着替えてきなさい」

その遣り取りを横目に、直樹はさっさと食事を済ませ、
「それではお父さん、勉強がありますので失礼します」
「…うむ」

そうして、直樹は2階の自分の部屋へと入っていくのだ。

自室に入ると、直樹にはまずやることがある。

学習机の鍵の掛けられた引き出しを開けて取り出したのは、1冊のノート。

その表紙に書かれているのは、

『正道の系譜』

…：僕は本当の両親や祖父、祖母を知らない。
だけど、僕にも間違いなく親はいた。

そこから受け継がれているものが、必ずあるはず。

そう思い、書き始めたこのノート。

日々あったことなどを、書き連ねている。

『お父さん』 『お母さん』

この家はとても裕福です。

きつとこれも、お2人から継承された運なんでしょう。

まだ見ぬお2人のため、僕は一步一步駆け上がります。
見ていてください。

そしておじい様、おばあ様にも、見事に成し遂げる僕の成功を自慢
してください。

僕はやってみせます。

切欠 1

直樹は知っていると云う。

この世の中はフルイのようになってい、と。

このフルイは下に落ちてはいけないもの。

残ってナンボのもの。

一歩外に出れば、上下左右へとフルイにかけられる。

細すぎれば落ちてしまう。

太りすぎれば潰される。

必ず枠の中に残り、行く末は枠になってみせる、と。

その日も直樹はいつものように、夜中の1時までずっと勉強をしていた。

睡眠時間も大事だと信じている直樹は、必ず6時間は眠るようにしている。

朝7時に起きる彼にとっては、ギリギリの時間。

時計を見、そろそろ寝ようかとベッドに入り掛けたが、その前に水を一杯飲もうと自室を出て台所に向かう。

その途中、父母の寝室から聞こえてきた、声。

「……いいですか、あなた。慶也が本当の息子なんですよ？あの子にはもっと頑張ってもらわなきゃいけないじゃないですか。」

今はのびのびと野球をやらせていますけど、後々はもっと頑張らせます。

だからあの子にも、もっと目を向けてやってください」

「…分かってはいるが…どうしても要領の良い直樹にばかり目が行ってしまっただ。

慶也に頑張ってもらわないといかんのは、私も分かっている」

「……………」

直樹がこの会話を耳にしたのは、これが初めてではない。

そして、その度に思う。

……僕が一番、分かっています。

今の慶也は直樹にとってダークホースでしかないが、少しの違いで一番のライバルになる。

……競争だろ。

分かっているよ。

しかし直樹にとって、慶也は本当に可愛い弟でもあるのだ。

直樹はそっとその場を離れ、台所には向かわずに自室へと引き返した。

……何の問題もない。

僕が、頑張り続ければいい。

音を立てないようにドアを閉め、布団に潜り込んで息を潜め、……

そして思い出す。

そういえば前にアレを聞いたときも、なかなか寝付けなかったなあ……。

その夜、直樹は最後に3時過ぎを指した時計を見て、眠りに就いた。

この街に移り住み、もう一月が経とうとしている。

一月もあれば慣れるだろうと思っていた街。

しかしその風に、直樹はまだ吹き晒されたまま。

転校先のこの学校は、さすがに進学校。

授業中は水を打ったような静けさで、教師の声と鉛筆を走らせる音のみが耳に入ってくる。

しかしあの、休憩時間の賑やかさ。

みんなの声のデカさ。

登下校の騒ぎっぷり。

これに、直樹はいまだについて行けずにいるのだ。

ギャーギャーギャーギャーとデカイ声で……

そんなことを思いながら登校している直樹の横を、5〜6人の集団が追い越し、駆け抜けて行く。

「オイッ！何やっとんねん！！早よう来い！」

俺らより教室に入るのが遅かったら、ケツキックやぞ！！」

振り返ると、すぐ後ろから何人分ものカバンを持たされた同じ学校の生徒が、ヒイヒイ言いながら走って来た。それを見て直樹は眉を顰める。

何だ、イジメか？

この学校にもやっぱりあるのか。

…みんな、ヒマでいいね。

こんな時間のロスに付き合わされないようにしないと。こっちで暮らすのも2〜3年の辛抱だろうから。

直樹は標的になっているその彼が、自分のクラスメイトであることも知らない。

他人には全くと言っていいほど興味がないのだ。

と、その時。

直樹の背をバンツ！と叩いて追い越していく人がいた。

「!?!」

驚いて顔を見ると、同じクラスの女子。

名前は、久保紀子。

「秋月くん、おはよう!」

彼女は昨日行われた席替えで、直樹の前の席になった子。

「あ、おはよう……」

そう答えながら、何かと自分に話しかけてくる彼女を直樹は密かに

苦手と思い、要注意人物だと自分のリストに載せている。

教室に入ると、直樹は自分の机の上にカバンが置かれていることに気付いた。

「あー、ゴメン。今どけるね」

そのカバンは紀子のもの。

彼女はまた笑顔で直樹に話しかけてきた。

「ねえねえ秋月くん。『ひょうきん族』 見てる？」

テレビを全く見ない直樹は、紀子が何を言っているのかサツパリ分らない。

…ひょうきん族？

何だ？ 暴走族の一種か？

そんなことを考えている。

「アレ？ひよつとして見てないん？私なんか早々にドリフからひょうきん族に乗り換えたんやでえ。」

ブラックデビルがさんまやない時から、高田純次の時から見てねんで！」

「?????」

直樹は彼女の言葉がサツパリ理解できない。

「…………えつと…………今、人と悪魔と魚が出てきたことは分かった。マンガかな？」

そう聞き返す直樹。

「え~~~~~ッ!!マンガとちゃうよ!

土曜の8時からやってんねんで!見てみなよ。

マンガって!」

ちよつと考え、紀子は続けて、

「秋月くん、マンガとか見るの?」

「……マンガを見る?」

本屋で置いてあるのを見たことはあるよ」

直樹はこの地方の『見る』『読む』の意味がイマイチつかめていない。

紀子はそんな直樹に、

「あ、そうや!」

と言って、カバンをガサゴソし始めた。

「さっき返ってきたから、コレ貸したげるよ」

直樹の机に置かれたのは『ナイン』というマンガ本。

「コレ全5巻やねん。マンガとか読まへんのやったら、手頃な冊数やろ。」

結構面白いから読んでみて」

「……………」

されるがままの直樹。

え ……そんな時間ねえよ…。

そう思いつつ、言い返せない。

世間はやはり、広い。

そう思った。

切欠 2

直樹はマンガを手に取り、表紙から裏表紙へぐるりと眺めてみた。

マンガなんて、子供の頃に隠れて読んだ『ドラえもん』以来だ……。

そのマンガはどうかやら野球マンガのよう。

直樹は帰り道、本屋で参考書を買ったついでに、『野球入門編』という本も買って見た。

何しろ野球のルールなんて全く知らないのだ。

家に帰ると早速部屋に閉じこもり『野球入門編』を素早く読み、ルールを頭に入れる。

それから、紀子に借りたマンガを読んでみる。

「……………」

そのマンガは、中学まで陸上・柔道のエキスパートだった2人が、高校で野球部に入り、甲子園を目指すという話だった。

最初はナナメ読みくらいにしよう、そう思っていた直樹。

しかし自分でも信じられないくらいに、のめり込む。

ほぼ初めて読むマンガに、夢中になってしまう。

あつと言う間に、一気に5冊全部を読み切ってしまった。

切なくもあるその青春ストーリーに、直樹は今までにない感動を覚えた。

その日の勉強は、終始何となくフワフワとした気分。

直樹はそれを早めに切り上げ、もう一度マンガを全て読んでから、

その日眠りに就いた。

次の日、直樹は朝一番にそのマンガを紀子に返した。

「あ、これ、ありがとう」

「早ッ！ もう読み終わったん？ 急がんでいいのに。どうやった？ 感想は」

え！ と思う直樹。

「感想文、書いた方がいいの？」

その返事を聞いて、笑い転げる紀子。

何か間違えた、と気付いた直樹は、
くそー……人と接するのには、僕にはちょっと限界があるな……
などと思っている。

「感想文なんかいらさないよ。面白かった？」

「うん、面白かった」

いつになく、大きめの弾んだ声で返事をする。

「私、マンガいっぱい持つてるから、面白いの貸したげるよ」

「あ、ありがとう」

本当にありがたいと思っているが、あまり貸してもらって時間を取られるのも堪らないあと、冷静に思う直樹もいる。

と、その時、紀子はイキナリ立ち上がり、

「秋月くん、ちょっと立ってみて」

直樹は言われるまま、立ち上がった。

紀子はそんな直樹の正面にピタツとくっつくように立ち、自分の頭頂部に手を当てて、

「ねえ秋月くん、身長何センチあるの？」

「えつと……、こないだ測ったときは確か、180だったかな」

「えー！　そんだけ身長あるんやったら、バレー部に入りなよ！」

私の家ってね、その通りの商店街にあるスポーツ用品店やってんねんよ。

親が何か運動せなアカン言うてね。私、バレー部なんやわ。

秋月くんもやりなよ」

直樹はこういう意見に対しては、いつでも意見を持ち合わせている。僕には、娯楽に費やす時間などない。

そう答えようとすると、紀子が続けて言った。

「今日は土曜日だから、2時から体育館で練習してるから。」

一回見においで。

そんだけ身長があつたら、何かやらなアカンよ」

「いや、いや、僕は……」

と言い掛けた時、がらりとドアが開き、担任が教室に入ってきた。

「……………」

断りきれなかった直樹。

自分の席の前に座る紀子をじーっと見ながら、

この子は一体何のためにこんな進学校へ通ってるんだ？

成績の方もさぞかし……

巻き込まれちゃダメだ。

そんなことを考えていると、担任の教師が皆を見回しながら大声を張り上げた。

「こないだの実力テストの結果を配るぞー」

自分が何番なのか、今どの辺りにいるのがちゃんと確認せえよー」

それは直樹が待っていた瞬間。

前の学校では常に1番だった直樹。

この学校での自分がどんなものなのか、早く知りたい。

配られたその用紙には、学年全員の点数のみが表になって高い順に並べられていた。

右上には自分の名前と点数。

生徒たちはこの自分の点数と、表の点数を見比べ、自分の順位を知る。

直樹はまず、表の1番上を見してみる。

そして自分の点数と見比べてみる。

直樹は学年で1番だ。

それを確認した直樹はホッとした。

それから冷静に、2番の点数を見してみる。

しかしその点数を見て、直樹はギョツとした。

自分とたったの5点差で、2番についている人間がいるのだ。

……嘘だろ。

あのテスト、結構難しかったぞ!?

くっそー!どこのどいつだ!?

この学校、侮れねえ。

そんな直樹の耳に、前から同じように「くっそー!」と言う声が聞こえてきた。

その声の持ち主である紀子がバツと振り返り、

「ねえ秋月くん、何番?」

直樹はまだ動揺しつつ、一番だったからまあいいか、と紀子に自分の用紙を見せる。

すると、紀子から信じられない言葉が。

「あ!私を抜いたの秋月くんやね!くっそー!ずっと1番やったのに!」

次は負けへんよ!」

そう言っつて紀子はニコツと笑った。

「……………」

……………何言っつてんだ、この子。

そう思いながら、紀子の用紙を奪い取りその点数を見てみると。

「!」

『成績の方もさぞかし…………』

つい先ほどそう思った彼女が、自分と5点差で2位につけている。

驚いた直樹は思わずガタツと席を立ち上がり、紀子の顔を凝視してしまっつた。

机上での勝機に危機を感じる前に、

マンガ本をやたらと所有し、クラブ活動までしているこの子が、僕と5点差…………!?

直樹の心臓はドキドキしている。

直樹はこのドキドキが、自分の戦々恐々とした心境だと思い込んでいるのだ。

そして彼はこの時初めて、紀子が振り返るたびに髪からイイ匂いがすることに気が付いた。

この日は土曜日。

学校の授業は午前中のみ。

直樹の土曜日の昼は本来なら勉強漬け。そしてそうしなければならぬのが直樹のルール。

しかし、この日は昼食を済ませると急いで本屋に駆け込む。

そして購入したのは 『バレーボール入門編』

直樹は店を出るとすぐに包装を破り、その場でバレーのルールを頭に入れる。

自分自身、今何をしているのか分かっておらず、そしてそのことに気付いてもない。

気の向くままに身を任せている、それだけ。

その足で向かった先は、紀子に言われた学校の体育館だ。

中からは大きな声やボールの音がひっきりなしに聞こえてくる。

入口からそつと覗いてみるとそこではバスケット部、バレー部、卓球部が練習しているのが見えた。

バレー部の方を見渡し、集団の中に紀子を見つけた直樹はその場に

立ち尽くし、ただただ紀子のことを見つめている。

今話しかけたら、怒られるよな……

そう思い、タイミングを見計らっている。

1時間ほど経った頃、バレー部員たちが休憩に入った。

今だ！と思い、紀子の元へ駆け寄ろうとした直樹は、しかしその視界に入ってきた光景に足を止める。

紀子が男子バレー部員と仲良く談笑しているのが目に入ったから。

「……………」

ここで、直樹はようやくいつもの自分を取り戻した。

……………アレ？

僕は一体何をしているんだろう。

何をしようとしてんだ？

そしておもむろに向きを変え、体育館を後にする。

……………チクシヨウ。

一体何時間ソーンしたんだ！？

クソッ！

やっぱり世間は、やたらと広い！

そう考えつつ、モヤモヤとする自分の心境を振り払うように家へと帰る。

遅ればせながらやってきた、本来の土曜の午後。
机に向かい、己を取り戻したと信じ切っている直樹は、自分が何故
今、不貞腐れているのか分からないまま。

パキン

ポキッ

シャーペンの芯が、やけに折れる。

何でこんなにイライラしてるんだよ？

あー、もう！

教科を変えれば多少気分も変わるだろうと本棚に手を伸ばした時、
背後からノックの音がした。

「はい」

直後部屋の中へ飛び込んできたのは、弟の慶也。

「兄さん！コレ見て、コレ見て！！」

慶也がバツと広げて見せたのは、背番号が付いた野球のユニフォーム。
△。

大きく「5」と書かれた、ユニフォーム。

「兄さん！入ってすぐにレギュラー番号もらっちゃったよ！スゴイ
でしょ！！」

喜び、飛び跳ねるように喋る慶也に、直樹は笑顔で答える。

「おー！スゴイじゃんか！」

そして頭の中を駆け巡らせる。
先日、野球入門の本を読んだばかりだ。

5番ってことは、

- 1、ピッチャー
- 2、キャッチャー
- 3、ファースト

……

「サードだ！サードだろう！？」

そう言った直樹に、慶也は大喜びで

「そう！サード！！」
そう叫ぶ。

「スゲエな。入ってそんなに経ってないのに、もうレギュラーって
頑張ったな！」

すると飛び跳ねるのを止めた慶也は、肩を落として俯いた。

「……でもね、入って間もない僕がレギュラー取っちゃって、前の
レギュラーの高橋くん、怒ってるんじゃないのかな…。
嫌われたらヤダな……」

それに対し、直樹は即座に返事をする。

「いいか、慶也。そんな気持ちでいるのなら、自分からレギュラー
を外してくれって言いなさい。」

野球っていうのは9人でやるスポーツだろう。チームプレーが一番
大事なんだよ。（『野球入門編』で得た知識）

その高橋くんだって、次はきつと慶也より上に行くよう頑張ってく

るんだよ。

慶也がそんなことを考えていたら、必死で競争した高橋くんにも失礼だろう？

胸を張って、堂々と試合に臨みなさい。

今の慶也にできることは、高橋くんを気遣うことじゃない。全力でチームのためにプレーすることだろ？」

直樹の言葉に、慶也はこくと頷いた。

「うん、分かった。

レギュラーになったご褒美に、お母さんがグローブも買ってくれて言っただ。

僕、頑張るよ」

「うん、それが一番だ」

慶也はにこっと笑うと、そのまま部屋を飛び出して行った。

「……………」

今まで慶也に対して、何度かこういうことを言ったことのある直樹。この後、必ず鬱になる。

……………協調性。

それを問われたとき、僕なんかより慶也の方が断然高いレベルで生きている。

僕が言っていることは、全て本で得た知識。

父は直樹に諭すように教え込む。

友など必要ない、と。

…友など、必要ない、と。

しかし直樹は思うのだ。

友人というのは、一生の宝でもあると言いますよ。

……お父さん。

「……………」

こうやって、いつも1時間は頭を抱え込んだまま。

やがてハッと気付いて時計を見ると、すでに時刻は8時前。
その針を見て直樹は思い出した。

………そういえば、久保さんが8時からテレビ見ろって言ってたな。

直樹は悩むのを止めて立ち上がり、そっと階下へと降りていく。
父がいないことを確認し、リビングに行くと、慶也がすでにテレビの真ん前を陣取っていた。

「アレ？兄さんテレビ見るの？」

「あー、イヤー、ちよっとー……うーん……ちよっとね………」

要領を得ない答えを返した直樹に、慶也は、

「兄さんも一緒にコレ見ようよ。めちゃくちゃ面白いよ」

テレビの画面を見ると、番組のタイトルが出ている。

『オレたちひょうきん族』

あ、コレだ。

直樹はソファに座り、慶也と一緒にその番組を見始めた。
そしてまず、思ったこと。

……暴走族の一種じゃねーんだな……

直樹の目に飛び込んでくるもの。
大人たちが大勢集まり、馬鹿のフリをしながら水浸しになったり、
粉まみれになったりしている。
そんな様。

初めて見るそうだった番組に度肝を抜かれながら、知らず知らずの
うちに腹を抱えて笑っている。

やっぱり世間は
やたらと

広い！

直樹の持つ軸はへし折れないまま、何かに困われていつているよう
にも見えた。

切欠 3

世の中は自分の思っているものと、何かが違うような気がする。直樹はそんなことを考え始めた。

マンガで読んだあの、ボールを投げて打って走る野球というものを、慶也は仲間と一緒にやってるんだよな。

ひよっとして今の僕でも両手を広げて歩いているだけで、向こうから何か引つかかってくるんじゃないか？

楽しいこと。

面白いこと。

アレやコレやと考えながら登校する直樹の背を、今日もバンツ！と叩き、

「秋月くん、おはよう！今日も大きいね！」

そう言いながら駆け抜けていく、紀子。

先日まで要注意人物だった彼女は、今は直樹の注目の的だ。

ちゃんと遊んで、勉強もして、僕とたったの5点差…。

一度、勉強の仕方を聞いてみようかな。

教室に向かいながらそう考え、先日のバレー部の見学を思い出す。

何だか分からないけど、イライラしたな…

何だよ。

朝から起伏に忙しい直樹。

教室に入り、席に着くと、今日は自分から紀子に話しかけてみた。

「あのね、僕テレビ見たよ。『オレたちひょうきん族』」

「あ、ほんま。面白かったやろ？」

「うん、びっくりした」

こんな他愛のない会話をした経験など、今までなかった。

紀子の仕草一つひとつに直樹もつられ、頭を上下させている。

朝からとても、忙しい。

この日も何事もなく、直樹は全授業を受け、帰宅の途についた。

しばらく道を行くと、先の公園から数人が直樹のことをじっと見つめている。

それに気付かず前しか見ていない直樹に、その中の1人が、

「ちよつとー、秋月くん」

直樹が顔を向けると、そこには5〜6人の集団+荷物をたくさん持たされている1人。

「ちよつとコツチへおいでやー」

その言葉を聞いた直樹は、しかし自分は彼たちに用はない、そう判断し、さっさとそこから立ち去ろうとした。

が、

「オイッ！ちよつと待てエ言つとんねん！！」

少し荒くなつた声に、直樹は足を止めて振り返った。

「不動産 建設の御曹司さん。

用事がある言つとんねん」

そう言った彼らに、直樹はピクリと反応して歩み寄る。

「……何？」

この状況がどういうものなのか、これまで人と接してきていない直樹にはイマイチよく掴めていない。

そんな直樹に、リーダー格のような男子が言った。

「あんな、秋月くん。こないだの実力テスト、1番やったんやってな。

スゴイねえ。

僕は君が来るまで、学年でずっと2番やったんよ。

久保には勝てへんのやけどなー」

紀子の名前が出て、ニコツとする直樹。

その男子は続けて、

「何言うてるか分からへん？また2番になりたいなー言うてるんや君、どうしたらいいか分かるやるー？」

しかし、あまり意味が分からない直樹は思った通りを口にする。

「じゃあお互い頑張ろうよ。また3ヵ月後にテストがあるじゃん。

今度も負けないよ」

それを聞いた相手の彼は、明らかにイラッとした顔で叫んだ。

「誰がそんなこと言うてんねん！オマエ、アホか！！

ワザと点数落とせ言うてんのや！！」

「え？そんなことできないよ」

直樹が即答すると、その彼はフツと鼻で笑った。

「昨夜、君のお父さんがウチに来てたよ？」

それを聞き、顔つきの変わった直樹。

すると取り巻きが、

「井本くんのお父さんはね、市の長なんやで？地元の名士
いうヤツや」

…コイツの名前、井本っていうのか。

直樹はその時、紀子以外の同級生の名前を初めて覚えた。
2人目だ。

「そうそう。僕のお父さんと銀行に勤めている叔父さんに、君のお
父さんが頭を下げて来てたんや。昨夜ね。

今度計画中のシヨツピングモールの話、デパートの話。

あの仕事が君のお父さんの仕事にならないと、困るんちゃうかなー
？」

直樹を見上げながら鼻でモノを言う彼に対し、直樹は完全にスイツ
チが入る。

「……ねえ、ソレって談合だよね」

それを聞いた井本は、

「だんごう？」

すると周りの取り巻きたちが

「だんごうって何だ？」

とヒソヒソと話し始めた。

「君さあ、そんなこと大きな声で、こんな所で話しちゃって平気な
の？」

ソレって犯罪だよ。

ウチの父を攻撃したら、間違いなく君のお父さんと叔父さんも捕ま
っちゃうよ？」

取り巻きの1人がカバンから辞書を取り出し、『談合』を調べている。

「ここには『相談する』としか書いてないぞ!？」
密かな声。

それを聞いた直樹、『さすがは中学生……』などと思っている。

「知らないのならいいよ。家に帰ってお父さんに言ってみな。今、君が僕に言ったことを。」

相談に乗ってくれると思うよ?。」

そして直樹は、カバンを背負わされている彼をチラリと見た。

「それと君さ。何でこんなことやってんの? アルバイト? 時給いくら?」

イジメられてやってるんだったら、今の君は相当なカスだよ。

僕は君のことを、とっても白い目で見てるから。

移るとやだから、僕に話しかけないでね。」

そう言い残し、直樹はその場からさっさと立ち去った。

直樹は心の中で拳を作る。

負けてたまるか!!

蹴落とされてたまるか!!

思春期の直樹。

それと同時に、紀子のが頭を過ぎる。

彼女の顔を思い浮かべ、口角を少し上げながら何となく両手を広げ

て家に帰った。

接触

直樹は今日もいつもと同じ時間に登校し、いつものように上履きに履き替えた。

その瞬間、何だか足元が冷たいような気がしたが、考え事をしていた直樹は気に留めることはない。

教室に入り席に着いても、彼はまだ考え事を続けたまま。

「おはよう、秋月くん」

その声にパチツと反応し、考え事を止める。

「おはよう」

ここまで来ても、直樹はまだ紀子の存在が自分にとってどんなものなのか、よく分かっていない。

ただ、彼女と喋ることは楽しい時間であり、そして学業以外に学校に来る意味の一つ。

それくらいのことには、気付き始めている。

紀子と話していると、

…… 大波・小波。

心地良いそよ風が、直樹の心を攫うように撫でて行く。

「ねえ、秋月くん。何でこないだ体育館来なんだん？」

「…行ったよ」

うん。

確かに行った。

「でもやっぱり、僕は運動はちょっと……」

あの時、何故途中で帰ったのか。
その理由を紀子にどう説明していいのか分からない。

直樹は紀子と遣り取りをしながら、カバンから教科書やノートを取り出し、机の中にしまい始めた。

しかし机の中に手を突っ込んだ瞬間、何だか手が濡れたような感覚。

……あれ？

するとその時、紀子が、

「あッ!!」

その声にびっくりして彼女を見ると、

「秋月くん、上履きが真っ黒やん！何コレ！？墨汁ちやうの!?!」
え!?!と慌てた直樹が机の中から手を出すと、その勢いで指先から何かがピンッ!と撥ねた。

あれ!?!

紀子を見ると、彼女の制服と顔に、黒い斑点。

どうなっているのか分からない直樹は、机の中を覗きこむ。
と、その中は墨汁でヒタヒタに浸かっていた。

……え？

そしてもう一度紀子の顔を見ると、顔に黒い跡。

……墨汁。

机の中に突っ込んだ直樹の手も、真っ黒になっている。

「あ！ごめんなさい！」

直樹は叫んで、ポケットの中から取り出したハンカチで紀子の顔を拭き始めた。

しかし慌てたせいで、直樹はその墨汁の付いた手で紀子の腕を掴んでしまい、彼女の制服は真っ黒になってしまう。

呆気にとられる紀子。

パニックになっている直樹。

そこで、直樹はハッと思い出す。

昨日の帰り道に起こった出来事を。

あいつらだ……！！

「久保さん、ごめんなさい。制服は弁償するし、後でちゃんと謝るから。」

ちよつとごめんね」

直樹はそう言いおき、教室を飛び出した。

上履きをぐじゅぐじゅ言わせながら、廊下に足跡を残しながら走って行く。

そして同じ学年の教室を一つひとつ覗き込みながら、昨日の帰り道に会った井本を探す。

が、どの教室にも彼はいない。

くそー！

まだ登校してねえのか！？

そう考えながらハンカチを濡らして教室に戻ると、紀子は女子に囲まれ、大変なことになっていた。

直樹は彼女の元へ濡れたハンカチを持って駆け寄り、
「本当にごめんなさい。制服とか全部弁償するから。ごめんなさい」
謝る直樹に紀子は、
「いいよ、いいよ」
と、笑顔で言ってくれる。

思わずニヤけてしまいそうな直樹。
しかし、ここは真面目に行かないと、と持ち直す。

紀子は自分が墨汁まみれにも関わらず席を立つと、
「秋月くん、とにかくその手エちゃんと洗って、その上履きと靴下
脱ぎなよ」

そう言って雑巾を2枚、直樹の上履きの下に敷いた。

「こつすれば汚れんやろ？」

そして水場まで、直樹について来てくれる。

水場に着くと紀子は、

「秋月くん、まず手洗いなよ」

言いながら、直樹の上履きと靴下を脱がせた。

「うわー、爪の中まで真っ黒になってるやん」

墨汁が広がって真っ黒な顔の紀子は、しかし自分のことよりも先に
直樹の世話をしてくれるのだ。

「習字の授業なんかあったっけ？」

私もあの墨汁のキャップ、ちゃんと締めてなくてカバンの中真っ黒
にしたことあるわあ。ハハハハッ！」

直樹のズボンの裾を捲り上げ、足を石鹸で洗ってくれる紀子。

「……………」

……幼少の頃から、自分の世話をしてくれたのは、お手伝いの土井
さんだった。

仕事として自分の世話をしてくれていた土井さんとはまた違うこの状況を、直樹は考え込むようにじっと見つめている。

そして天啓のように、心にひらめくもの。

『どうやら僕は、久保さんが大好きらしい』

そう理解した直樹の顔は、たちまち真っ赤になる。

「……………あ、自分でするからいいよ」

そう言う直樹に、紀子は、

「いいから、いいから」

続けて、汚れた直樹の足を洗ってくれた。

……………あぁ……………あぁ……………墨汁よ、ありがとう……………！

……………って、

違うよ！…！

井本……………ツ…！

が、

「……………」

足元では変わらず紀子がぱしゃぱしゃと静かな音を立てながら、直樹の足を洗ってくれている。

その頬には直樹の指から飛んだ黒い墨汁の跡。

「……………」

『今度は僕が拭いてあげるよ』

とは、恥ずかしくて言えない直樹。

「久保さん、ここにも付いてるよ」

「ここにも付いてるよ」

と、2人で墨汁を落とし合っている。

「先生に言うて、上履き貸してもらおうか」

気遣うような紀子の言葉に、しかしそこで直樹のいつものスイッチが入った。

「いや、結構。これくらいのことは自分で打破しないと。今日はこのまま裸足で過ごす。」

その前に、僕はやることがあるから。

久保さん、本当にごめんね。制服は弁償するから。

本当にごめんなさい」

直樹はそう言うて、教室に向かって駆け出した。

教室ではすでにホームルームが始まっており、担任が教壇に立っていた。

「おい、秋月。お前、裸足で何やっとなのや？」

それに対し、直樹は応える。

「あの、久保さんはもう登校してるんですが、僕のせいで少し遅れます」

そして視線を流した直樹の目に、飛び込んできたもの。

……井本。

「ああッ！！」

叫ぶ直樹を、井本はポカンとした顔で見つめている。

「先生、ちょっとすみません。彼と話があります」

直樹はそう言って、井本の正面に立った。
ガリガリの細身だが、身長が180もある直樹が目の前に立つとそれなりの迫力で相手は怯むのだ。

井本は少したじろぎながら、

「な、何や!？」

そんな彼を直樹は真っ直ぐに見下ろし、口を開いた。

「君、同じクラスだったのか。」

井本くん、よくもやってくれたね。久保さんにまで迷惑掛けて」

まず紀子のことを主張した直樹は少し冷静になり、自分の姿を改めて見てみる。

……この学生服は、つい先日買い換えたもの。

それが、墨汁まみれ。

こういうことがあった場合、直樹はお手伝いの土井さんに裏から手を回して報告する必要がある。

直樹の家庭では、とても大変なことなのだ。

制服を買い換えるということよりも、何故墨汁まみれになったのか。それを説明するのが大変なのだ。

直樹は井本の机をバンツ!と叩き、

「君、僕と競争するんじゃないかなかったのか?こんなことしてたら、一生僕には勝てないよ?」

安心してよ。仕返しなんか考えてないから。時間の無駄だからね」
それだけ言って、直樹は自分の席に着いた。

その様子をじつと見ていた担任は状況が飲み込めず、

「ま、まあ何かよう分からんが、仲良うせえ」

そんなことを言っている。

そこへがらりとドアが開いて、紀子が戻ってきた。

「遅れてすみません」

「あー、秋月から聞いた。何やよう分からんが、早う席に着け」
席に戻った紀子は、直樹を振り返って首を傾げた。

「大変なことになったねえ。制服はもう1枚あるから、気にせんでいいよ」

そしてニコツと笑う。

直樹もエヘツと笑い返す。

直樹は、紀子という波に吞まれっぱなしなのだ。

この日、学校から家への報告が一番怖い直樹は、この墨汁事件を何とか遣り過ごすことに成功した。

……とんでもない1日だった。

腹が立つわ、嬉しいわ……

何なんだ、コレ。

そう思いつつ、いつもの道を下校していた直樹は、昨日の公園の前を通りがかったところで、10人ほどの集団が固まってこちらを見ていることに気付いた。

その中に、井本の顔が見える。

昨日と違い、今日の直樹は自分からその集団に駆け寄って行った。

「また僕に何か用かい？」

すると井本は直樹に詰め寄り、いきなり突き飛ばすと、

「…秋月くん。君は僕らの中で過ごすっていうルールを、イマイチ

分かってないみたいやな」

「……………」

直樹は冷静に、集団の人数を数える。

「君が何を言いたいのか分からないけれど、あんな下らないことに時間を費やしている君が可哀想でしようがないよ。」

教科書が全部ダメになっちゃったじゃないか。どうしてくれるんだって言いたいのは、こっちの方だよ」

直樹は『人と揉める』ということがどういことなのか分かっていない。

この人数相手にもメゲはしないのだ。

「僕は何もしてへんって言うてるやる!!」

叫ぶと同時に、井本くんは直樹にタックルを仕掛け、直樹の体をその場に引き倒した。

ザザザツ!!

間髪入れず10人ほどの彼たちが一斉に直樹を取り囲み、殴る蹴るの暴行を加え始める。

ドカツ!

ドカツ!

ドゴツ!

倒れ込んだと同時に眼鏡が外れてしまった直樹。眼鏡なしでは何も見えない。

暴行なんかより、眼鏡を探すことに必死になる。

というより、何より今自分がどういう状況に置かれているのか、理解できていない。

自分が暴力を振るわれるなど、これまで一度も考えたことがないのだ。

「……………」

地面に這わせた掌が、眼鏡に届く。
急いで掛けてみると、彼らの足の隙間から見える、カバンをたくさん背負わされている、彼。

……………マズイ。

直樹はようやく状況を理解する。

おどおどとした彼の姿を見ながら、
今度は僕が、ああなるのか……………。
そんなことを考える。

そして次に考えること。

これ、怪我になったら、お父さんとお母さんに何て言い訳すればいいんだ！？

今日は一体、何て日なんだ！！

暴力の痛みなどよりも心配事がある直樹は、されるがまま。

しかししばらくの暴行の後、それらの手足がピタッと止まった。
それから、遠くの方から聞こえてくる声。

「おー！いっぱいおるやんけ！　中のヤツらがこんだけおったら、
誰ぞ一人付き合ってくれるやろ、パクウ」

「そっかー？コイツらが俺らなんか相手にしてくれるとは思わへんねんけどな」

すると直樹を取り囲んでいる1人が小声で言った。

「ヤバイで。 中のヤツらや！」

次の瞬間、彼らは蜘蛛の子を散らすようにその場から走り去って行く。

「おーい！待てエヤ！ちやうつて！絡みに来たんちやうつて！！」
その声とは反対側に遠ざかって行く、たくさんの足音。

やがて、目を閉じたまま体を丸めた直樹の元に、違う足音がだんだんと近づいてきた。

「おーい、タケシ。 1人残ってんぞー」

声の持ち主は横たわったままの直樹を引き起こし、地面に座らせてくれた。

そこでやっと目を開けた直樹の目前にいたのは、とうもろこしを乗つけたような頭をした1人と、派手な金髪をオールバックにした1人。

とうもろこしの方には眉毛がない。

袴のような学生ズボンに、普通のものよりボタンの多い学生服。

そんな2人が直樹をじっと見ていた。

直樹はハッと我に返り、

…ひよ、ひようきん…！

いや、暴走族だ…！

それは、直樹とは対極線上で生きてきた人との、初めての出会い。

衝撃 1

「お前、イジメられっ子なんか？」

眉毛のないとうもろこし頭の方が、直樹にそう話しかけてきた。直樹はその言葉を聞いて、ハッと我に返る。

イジメられっ子に見えてんのか!?

…マズイ!!

こういうパターンの打破の仕方……
分からない。

直樹はその場で、大きな声で

「くそッ！」

と叫ぶ。

すると今度は金髪のオールバックの方が、

「お前、中やんなあ？何年生？」

「……2年生」

一言言っただけで直樹は立ち上がり、その場から立ち去ろうと一歩を踏み出した。

しかし、

「おう！ちよつと待てエヤ。

アイツら追い払ってやったんやから、俺らに何かあってもエエんと
ちやうん？」

その言葉に直樹は振り返る。

お礼のことだろうと口を開き、

「あ、どうもありが……」

そこまで言いかけたところで、とうもろこし頭がそれを制した。

「イヤ！あ、ちゃう！ちょっと待てエ！！礼なんか言わんでエエ！」
「……………」

……この暴走族は何を言っているんだ？

直樹には他に考えたいことがあるというのに。

しかし、もちろんそんなことには構わないとうもろこしは、

「お前、中つてことは頭エエよな？ほんで2年いうたら俺らと同級やねん。ちょっと頼みたいことがあるねんけど。
お好み奢るから、ちょっとついてきてくれんか？」

直樹はボーツとしながらその言葉を聞いていたが、

……お好みで何かを奢ってくれる？

その一言に反応する。

「え！それって何でもいってこと！？」

あのさ、ウチの学校のセーラー服がいるんですよ！セーラー服が欲しいんです！！」

「……………」

「……………」

……しばらくの沈黙。

やがて、とうもろこしが隣を向いて金髪にこそつと話しかけた。

「……………おい、パクウ。コイツ、ヤバインちゃうんか？ヘンタイやぞ？ほんまに頭エエんか？コレ。ほんで、何か標準語喋ってるし」

「あのなあタケシ。お前、何回言うたら分かるんや？コイツが喋ってるのはな、標準語やない。関東語いうんや。

標準語いうのはな、アナウンサーがニュース喋ってる時に使ってるのが標準語いうんや。

前も言うたやろ。ドアホ！」

「どつちでもエエやんけ！」

「良くない！1回言うたら覚えろ」

何やらケンカを始める2人。

直樹は早く先ほどの自分に対する暴力を自身の中で完結させたいのだが、取り合えずはそれを置き、2人の遣り取りが終わるのを待っている。

何しろこの2人はセーラー服を買ってくれるかもしれないのだから。

やがてひとしきり言い合った彼らは、直樹に視線を戻して言った。

「セーラー服は高いからよう買わんけど、お好みじゃアカンのか」

「だから！セーラー服！！」

……噛みあわない両者。

すると金髪が口を開いた。

「何や、もうメンドイ。結果、俺らはお前を助けてやったんや。エ

エから黙ってついて来い」

「……………」

彼の言うように、助けてもらったのは事実だな。

そう思った直樹は、黙って彼らについて行くことにした。

どこへ行くつもりなのか、歩き出した2人の後をついて行きながら、カーブミラーや窓ガラスを覗き込む直樹。

自分の顔に傷がないか心配なのだ。

そんな直樹にとうもろこしが、

「しかしお前、コッチ来て間アないみたいやな。この辺のモンは俺らのことを見たら、ビビッて逃げてまうんやけどな。

なあ、パクウ？俺、コイツ気に入ったで。

背エもデカイし、ケンカやらせたら実はめっちゃ強いんちゃうか？」

ここで、直樹はまず2人に聞かなければならないことがあったことに気付いた。

「ところで、暴走族の君たちが、僕に何の用ですか？」

すると、その台詞を聞いたとうもろこしは目を剥き、

「んだッ、誰が暴走族や！？いつ俺らが『自分は暴走族です』言っ
た！？勝手に所属させんなや！全く！！」

「????」

……噛み合わない彼ら。

ワケの分からない直樹を連れ、2人はやがて細い通りにある小さな店へ入った。

その店の中には、大きな鉄板がたくさん並んでいる。

そして、とても香ばしい匂い。

うわー……

何だ、このイイ匂い。

そういえばお腹空いたな……

セーラー服よりも先に、食べ物を奢ってもらおうかなあ。

直樹は『お好み焼き』というものを知らない。

直樹がぐるりと見回した視線の先。

客らしき人が、大きな鉄板の上で何か丸いものを焼いている。

あ、分かった！

パンケーキだ。

パンケーキをご馳走してもらえるんだ。

直樹の家はお小遣いというものがなく、必要なものを買うときだけお金を渡されるシステムになっている。趣味も何もない彼はお金など必要ないため、持ち歩かない。もちろん下校の際に買い食いなどをしたことも、一度もない。

2人が座った席に、遅れて直樹も腰を下ろす。

「おばちゃん！いつものヤツ、3つ！」

そう言っつてとうもろこしは、近くにある冷蔵庫の中から勝手にジュースを取り出すと、直樹にも1本手渡した。

……この人、自分の家のように動いてるな。

この人の家なのか？

でもさっき『おばちゃん』って言ったよな……。

コレ、勝手に飲んじゃっていいのか？いくらなんだ？

初めての経験に戸惑う直樹。

さっき袋叩きにされたことも合わせ、知らないこの2人についてきた自分自身に翻弄されている。

「なあお前、コツチに引つ越してきてまだ間がないんか？」

「はい。えっと……一月くらいですかね」

「お前、中2やる？俺らと同級やから敬語なんか使わんでエエんやで？」

ふーん…そういうものなのか…。

直樹は着実に学習している。

その時、金髪が直樹の肩をぽんと叩き、

「何かゴメンな。急にこんなことになってな。ところでお前、名前何ていうの？」

俺はパク。パク・ヨンジ。日本名もあんねんけどな、今は名乗ってないねん」

「……秋月直樹」

「直樹、な。覚えた。」

お前、イジメられっ子なんか？」

その問いに、ポケットとしていた直樹は我に返る。

「何で！そう見えた！？僕はイジメられっ子なんかじゃない！」

直樹が少し大きめの声で言い返すと、その声にビックリしたパクは、

「お、おう……。イヤ、お前さっきイジメられてんのか言ったら、何も言わんかったから……。」

えらいツツコミ遅いな」

そんな会話をしていると、やがて3人の前に銀の器に入ったモノが運ばれてきた。

2人はそれを、スプーンのようなものでかき混ぜ始める。

直樹も見よう見真似で、同じようにぐちゃぐちゃとかき混ぜる。

よく見るとその中にはエビやキャベツなどが入っており、直樹が想像するものとは様相が違っていた。

パンケーキにいろんなものが入ってる。

何なんだ、コレ……？

直樹の目の前で、2人は器を傾け、それを鉄板の上に広げた。

直樹も急いで同じ作業をする。

ジュウツと小さくいい音がした。

これから一体何が出来上がるのか、直樹は気になってしょうがない。

直樹が鉄板の上を見つめっていると、またとうもろこしが話しかけて

きた。

「あんな、実はな、お願いがあんねん」

「その前にお前、名前くらい言えや」

パクの声に、とうもろこしは、

「あ、そうか。俺、岡崎タケシ。転校してきて知らんやろうけどな、この辺じゃ俺ら2人で……、

何か自己紹介するのって恥ずかしいな……」

それに対し、パクはすぐに、

「それやったら、いらんことは言わんでエエ」

タケシは持っていたカバンの中から小学校の問題集を取り出し、何やら恥ずかしそうに直樹を見た。

「なあ秋月。お前、あの学校に行ってるってことは、メツチャ頭工
工んやる？」

俺に勉強の教え方を教えてくれへんか？」

直樹には、タケシの言っている意味が分からない。

「教え方を教えろって、どういう意味？」

直樹は鉄板で焼かれているモノをチラチラ見ながら、そう返す。

「イヤ、理由は聞かんしてほしいねん。俺が勉強を人に教えたいんや」

「うーん……」

悩んでいるフリをする直樹。

話は半分ほどしか聞いていない。

今は鉄板の上の変型パンケーキに夢中で、それどころではないのだ。
本当は一瞬たりとも目を離したくはない。

「……要するに僕に勉強を教えてくれってこと？」

するとタケシはすぐに言い換える。

「教え方を教えてくれ言うとんや」

そこでパクが再び口を挟んだ。

「イヤ直樹、お前の言うてる通りでエエ。コイツはな、大分アホやからな、どう説明していいか分からへんのや。」

おいタケシ、もう少し上手いこと説明せんかい。

今、直樹が言うたようにお前が理解せなんたら、人に教えることなんかできへんやろ」

「あ、なるほどな」

パクの言い分を聞いて、タケシは納得したようだった。

しかしそんな会話などに構わず、

「ねえ、コレ、焦げたっばいニオイがしてくるよ?」

鉄板の上を監視していた直樹が報告する。

「あ、ほんまやな」

そう言つて、2人は大きめのスプーンのようなもので、それをくるツと引つ繰り返した。

「お前もやってみい」

食べるものを自分で作っている。

そんなことは生まれて初めての直樹は、同じように引つ繰り返そうとしたが、

ぐちゃッ!

直樹の引つ繰り返したものは半分に折れ、千切れてしまった。

「いや、まだ修正は効くでー」

そう言つてタケシは直樹のお好み焼きをぎゅっぎゅっと押し始める。

「ほんまは押したらアカンのやけどな」

見事に丸くなつたお好み焼きを見て、直樹は

「君、スゴいねえ。料理とかするんだね」

感心する直樹に、タケシはまた先ほどの話を始めた。

「なあ、頼むわ。帰る時、1時間でエエんや。俺に付き合ってくれんか？」

そこで直樹はようやく考え始める。

……うーん……1時間か……

1時間か……

そんな時間、ないんだけどな。

そして過去を辿り、先日慶也にした説教を思い出した。

……協調性

お父さんは、友など必要ないと言う。

でもこれを機会に、友ではないところから協調性を学べるんじゃないか？

人の道というのは、大体決まっている。

僕の信念は、これくらいじゃ揺るがない。

たった1時間だ。

直樹はそんなことを考え、しばらく悩んでみた。

衝撃 2

やがて直樹がふと横を見ると、パクは焼き上がったその変形パンケーキに、何かをかけ始めた。

あ、ソースだ。

これはソース。

明らかに、パンケーキとはモノが違う。

先ほどの悩みをスツ飛ばす、最近気が散りやすい直樹。

パクは焼き上がったものを皿に載せることなく、そのままダイレクトに食べ始める。

それを見て行儀が悪いと思う直樹は、しかし思い直すのだ。

でもこういう世界があることを、僕も知ってるよ。

素手で食べた方がおいしいものだってあるんだ。

知ってる、知ってる。

「ねえ、食べていい？」

尋ねた直樹に、タケシは、

「おう、食べて食べて。俺の奢りやで」

その返事に、直樹は同じようにソースをかける。

これは薬味だな。

そう確認しながら青のりをかけ、パクと同じように鉄板の上に置かれたままのソレを1口食べてみた。

瞬間、直樹は度肝を抜かれる。

おいしい……！！

何だ、これは！？

僕はこんなおいしいものに、今まで出合っただけでなかったのか！！
土井さんは何でこれを避けて僕をここまで大きくしたんだ！？

大袈裟な直樹。

しかし直樹にとっては大変なニュースなのだ。

「なあ、どうや？勉強教えてくれるか？」

タケシのその問いは耳には入ってきているのだが、直樹はそれこそ
それどころじゃない。

未知との遭遇・お好み焼きに無我夢中。

するとその時、店の入口がガラツと開き、同時に大きな声がした。

「あーやっぱりおった！！」

その声に3人は振り返る。

そこには、自分たちと同じ中学生くらいの男子が1人。

タケシと同じように、とうもろこしみたいな頭をしている。

「おーい！マイティー！ここや！やっぱりここにおった！！」

そう叫んで飛び出していく、その男子。

その様子を見て、パクとタケシは立ち上がる。

同時に、パクが言った。

「直樹、バタバタしてごめんな。俺な、お前んトコの学校におるボ
ンボンとか、嫌いやったんやけどな。」

お前、俺ら見てもビビらへんし、俺もお前気に入ったで。

さっきのタケシの話、OKでエエか？

明日つからお前んトコの学校の校門のトコで待つとるから、よろしく頼むな。

ちよつと俺ら、用事できてん。行かなアカンわ。

アイツらにお前の顔、覚えられたらかなわんからな、お前は裏口から逃げてくれるか」

「おいパクウ！早うせエ！！秋月、明日頼むで！！」
タケシが急かし、去ろうとする2人。

直樹は何が起こったのか分からない。

「いや、まだ食べ終わってないよ。途中だよ」

その台詞を聞いたタケシ、

「分かった！お前、天然ボケやる！さっきの状況見て何も分からんのか！

工工から早う裏口から逃げエ！そんなモン、いつでも奢つたる！」

「え！明日も！？」

「あゝゝゝ、もう！明日も！だから早う逃げろ！！」

「うん、ありがとう」

直樹のその返事を聞いた2人は、店を飛び出して行く。

ただ直樹は、こんなおいしいものを残していくのは忍びない。自分の分だけでも、と黙々と食べ続けている。

そしてふと、窓から見える光景に気付いた。

少し離れた空き地でパクとタケシ、2人が大勢の学生に囲まれている。

ん？何が始まるんだ？？

直樹の視線の先で、数人がパクとタケシに掴みかかった。

……何だよ、人のことをイジメられっ子呼ばわりして、イジメられてるのは自分たちじゃないか。

直樹は好み焼きを頬張りながら、その光景をじーっと見つめている。

しかし四角い窓の向こう、多勢に無勢の状況の中、バツバツと人を殴り倒していくのはパクとタケシ2人の方。

え！？どうなっただんだ！？

次々と大勢いた人数を減らしていく2人。

殴り飛ばされた人たちは、地ベタに転がって悶絶している。

それを見、直樹は今日の自分の姿を思い出した。

「……………」

急いで好み焼きの最後の一口を口に入れ、2人が言ったように裏口へ向かい、店のおばちゃんに声を掛ける。

「えっと、これ、奢りって言われてるんですけど。僕、今お金持っていないんですけど……」

するとおばちゃんは笑って、

「あー、エエよエエよ。タケシのツケでな。」

アンタ、良い学校行ってんねんから、あんなゴンタクレと付き合ったらアカンで、ほんま。

裏口あそこやから、早よ逃げな。

全く、あんなしてケンカしてるのなんか、いつものことなんや。

アンタみたいな頭のエエ子があんなんとツルんだからアカンのやで？分かった？」

それに対し、直樹は『はい』とは答えない。

「ありがとう」

そう言っつて裏口から駆け出す。

……難関に立ち向かうには、いろんな方法がある。
一つじゃない。

あの2人がやっていることも、選択肢の一つ。
僕の知らない道は、まだたくさんある。

直樹は全速力で家へと向かう。

それは決して、逃げているのではない。

早く家に帰って、今日あったことをまとめてしまいたいから。

直樹は自分の部屋で、いつもの『正道の系譜』に記している。
今日の出来事を。

集団で暴行を受けたことに対する打開策は、まだ見つかっていない。
殴られた傷は目立つものがこめかみ部分の一つだけだったので、両
面テープで髪の毛と肌を貼り付け、何とか誤魔化すことができた。

……えっと、

彼の名前が、岡崎タケシ。

もう1人が、パク・ヨンジ。

…あ、彼って外国人なんだ。

そういえば、もう一つ名前があるって言ってたな。

あ、なるほど。在日の人か。

へえ…初めて会ったなあ。

『日本について』の話なんかしてくれるかな。どうだろ…僕は結構右だからなあ。意見が違っていて言い合いになっちゃうかな……。

そんなことを考えながら、『集団暴行に対する打開策』が見つからないので、ワザと迷宮に入り込む。

今日の墨汁事件のせいで手元に教科書がないから、宿題をすることもできない。

明日には用意しておく、先生が言っていた。

何となく勉強をやる気のない直樹。

先ほど食べた変型パンケーキの姿を思い浮かべ、また早く食べたいかなどと思っている。

そこで彼は、ハッと気付いた。

あの2人が言っていたのは『お好み』で何かを奢ってくれるんじゃないかと、『お好み』を奢ってくれてることだったんだ。

あの食べ物『お好み』って言うんだ。

そう思った直樹は、そのまま自室を出て慶也の部屋へと向かう。

ノックをして中に入ると、慶也も机に向かい、宿題をしている最中だった。

「ああ、兄さん。何？」

「いや、別に…」

言いながらも、直樹には慶也に何点か確かめたいことがあった。

しかし質問という形にして問いかけると、自分の思う兄の威厳というものに触れるような気がして、慶也に対する問い方を考えている。

棚の上においてあるグローブを取り上げ、手を差し込んでパンパン！と叩いてみる。

それから、どこかで見たことのあるポーズを試してみた。

しばらくそんなことを続け、それからやっと慶也に話しかけた。

「……慶也さあ、お前、お好みって知ってるか？」

『知らねーだろ。うめエんだぞ』

この返事を用意していた直樹に対し、

「えー、お好み？お好み焼きでしょ？知ってるよ」

慶也は宿題を進めながら、こつちを振り向きもせずに返事をした。

直樹といえば、

え！？

『焼き』！？

『お好み焼き』！？

この時、彼は初めて『お好み』の本名を知る。

直樹の驚愕にも気付かず、慶也は続けて言う。

「こつちに来てもう何回も食べたよ？」

ほら、こないだ話したじゃん。あれから高橋くんと仲良くなってさ。

高橋くん家ってお好み焼き屋なんだよね。

何度も遊びに行ったから、何度かご馳走になったんだ。

おいしいよね、お好み焼き。もんじゃとは一味違うよ。僕はお好み焼き派かな」

「……………」

直樹はただただ沈黙を守る。

こう来た時にはこう返す、その想定をしていなかった直樹は、先ほどの決め事を破り、慶也に質問することにした。

「……あのさ、慶也。高橋くんとは友達なのか？こっちにきて、友達できたのか？」

慶也は相変わらず振り返ることもせず、

「うん。もう何人もいるよ。」

こないだも高橋くん家で人生ゲームやってさ。

暗くなっちゃって、帰ったらお母さんに怒られちゃった」

「じ、人生ゲーム！？何だソレ！？」

『人生ゲーム』

その名前を聞いて、とつても重く受け止めている直樹。

「ああ、スゴロクだよ、スゴロク。スゴロクをグレードアップした感じ。」

結婚したり、子供ができたり、お金を稼いでいくゲームなんだ。面白いよ。

お母さんに言っつて、僕も買ってもらおうかなあ」

双六で結婚で子供でお金儲け！？

何だ！？

何だソレ！！

「……………」

直樹はもう何にも言わずにグローブを手から外し、無言のまま棚に戻し、押し黙ったまま慶也の部屋を出る。

パタン。

ドアを閉めたと同時に、何となくグローブを嵌めていた手を匂ってみた。

臭エ！ 何だコレ！！

部屋に戻り、ドアに鍵を掛けてベッドに横になり、天井を見上げて小さな溜息。

グローブを手に着けると、こんなニオイがするののか。

……無知は罪なんだぞ？

その日、直樹はそのまま眠ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2369ba/>

正道の系譜

2012年1月6日15時49分発行